瓦礫の下のヒューマニティ

～ガザの《ジェノサイド》と私たち～

早稲田大学教授　岡　真理

◆はじめに

2023 年 10 月 7 日にパレスチナ解放組織ハマースがイスラエル領内を奇襲攻撃して、もうすぐ丸 3 年になります。2025 年の 10 月 10 日に停戦合意が発効して以来、ガザに関する報道は、めっきり少なくなりました。毎日のようにイスラエルによる攻撃があって、8 人、10 人のパレスチナ人が殺されていますが、今年 2 月末にアメリカとイスラエルがイランを攻撃すると、全く報道されなくなりました。そうした中で今回、お話する機会をつくってくださいました。どれぐらいお話しできるか分かりませんが、一端をご紹介できればと思います。

◆平和とは何か

平和とはなんでしょうか。戦争さえなければ平和なのでしょうか。ガザ地区は 2007 年からイスラエルによる全面的な封鎖の下に置かれています。人間の出入りや物資の搬入搬出が極度に制限され、生命を維持するのがやっとというぐらいのものしか入ってこない状況が続いていました。

2008 年 12 月から翌年 1 月まで 23 日間にわたる攻撃のとき、イスラエルは空から海から陸から、無差別にガザ全土を爆撃しました。白リン弾も使われました。白リン弾は、大気に触れている限り鎮火しません。なので肌に付くと、骨に達するまで皮膚を焼き焦がしていきます。吸い込んでしまうと、人間を内側から焼き尽くします。当時、ガザから送られてきた写真の中には、下半身が焼け落ちて炭になった上半身だけの赤ちゃんの写真もありました。

その後も断続的に攻撃が続きます。殺傷兵器の性能の向上は日進月歩で、2014 年の「51 日間戦争」のときは、TNT 火薬の量に換算して、広島型原爆 1 個分の爆薬が使用されました。当時、空撮された動画を見ると、東日本大震災の津波の被災地を想起させます。このときも毎日、ガザで子どもたちが殺されました。開戦から 1 週間後、イスラエルが無条件停戦を提案しますが、ハマースは「封鎖解除を条件としない停戦は受け入れられない」と言って、これを拒否しました。それに対し日本をはじめ西側メディアは、せっかくイスラエルが停戦を提案しているのに、ハマースが自分の条件に固執して条件を蹴ったために、ガザで子どもたちが殺されてると、ハマースを非難しました。しかし、ガザの市民社会の代表者たちは、戦争が始まる前の状態に戻れというのは、この時点で 7 年間続いている完全封鎖の状態に戻れということであり、それは生きながら死ねというのに等しい、攻撃があろうとなかろうと、私たちが殺されているということに変わりはないと言って、ハマースを擁護しました。

ガザで大量虐殺、大量破壊があっても、ひとたび停戦になると忘れてしまって報じられない。またしばらくすると、前回を上回る攻撃が起きて、また虐殺、破壊が起きる。それがこれまでずっと繰り返されて、今、ジェノサイドにまで至ってしまった。1970 年代にノルウェーの平和学者で「平和学の父」と呼ばれているヨハン・ガルトゥングが、平和とは単に戦争がない状態のことではない、「暴力がない状態のこと」なのだと再定義します。そして、暴力を三つに分類します。直接的暴力、構造的暴力、文化的暴力です。直接的な暴力は、物理的な破壊や肉体的な殺傷を伴う暴力です。その最たるものが戦争です。しかし、直接的暴力がないだけでは、消極的平和にすぎない。積極的平和とは、構造的暴力もないことです。貧困や差別、人権がないといった、構造が生み出す暴力もなくなって初めて、真の平和であるということです。

ハマースは、2006 年のパレスチナ評議会選挙で、EU の選挙監視団も近来まれに見る民主的な選挙であったとお墨付きを与える選挙で、第 1 党になりました。しかし、イスラエルやアメリカ、EU がハマース政権を認めず、ガザは内戦になり、ハマースがガザを統治することになり、パレスチナは分裂してしまった。でも、メディアはそういうことを何も説明せずに、「ガザを実効支配するイスラム組織ハマース」などと繰り返し、ハマースが IS のようなテロ集団であるかのようなイメージを私たちに植え付けているわけです。

◆ジェノサイド

ガザの保健当局の発表によると、身元確認できた直接的攻撃による死者が 7 万 3246 人、負傷者は 17 万人を超えています。行方不明者は 1 万人とありますが、その大半は、瓦礫の中にまだ遺体があって収容されていない人たちです。イギリスに『ランセット』という非常に権威ある医学雑誌があるのですが、昨年の 1 月に掲載された論文によると、直接的攻撃による死者は発表された数字の 4 割増しであろうと。犠牲者の中には攻撃で肉片となって飛び散ってしまって、遺体が確認できない人たちも大勢いるからです。とすれば、直接的攻撃による死者は 10 万を超えることになります。

行方不明者は、イスラエル当局の発表で 1,250 人から 1,320 人。そのうちガザ地区から拉致して連れていかれた人たちの 8 割は非戦闘員で、この中には女性、子どもも含まれます。昨年 10 月 10 日に停戦合意が発効したものの、毎日のように攻撃があり、死者は既に 1,000 人を超えています。さらに、近年の紛争では、間接的死者が 3 倍から 15 倍いるそうです。間接死とは、例えば、薬もなく、適切な治療が受けられなかったり、飢餓や凍死などによるものです。昨年 8 月、国際ジェノサイド学会が、これはジェノサイドであると発表しました。9 月には、国連の人権理事会の調査委員会も、これはジェノサイドだと認定しています。にもかかわらず、日本の主流メディアは依然として、これをジェノサイドと呼んでいません。

住宅も大量に破壊されています。住宅の 9 割が破壊されました。横浜市の面積が 438㎢ で、人口 376 万人です。ガザ地区は、365㎢ に 230 万人いました。横浜の 83%ぐらいの広大な地域が現在、地平線まで見渡す限り土砂の海、瓦礫の荒野となってしまいました。230 万の人口のうち、200 万人が家を追われて、避難生活を強いられています。

上下水道、学校、病院、農地、モスクなどの歴史的建造物なども破壊されています。そして医師や教師、知識人が狙い撃ちされています。ガザでは、人間が大量に殺されているだけではなく、ガザの地で、パレスチナ人が数千年にわたって生きてきた記憶も、歴史も、文化も、そして、未来も破壊されています。「全的破壊」という意味で、私はこれを「ホロサイド」と呼んでいます（「ホロ」は「すべて」を意味するギリシア語の接頭辞、「サイド」は「殺し」を意味するラテン語）。

◆入植者植民地主義

イスラエルとパレスチナの問題を考えるとき、まず押さえておきたいのは、イスラエルという国が、歴史的に「入植者植民地主義」国家であるということです。入植者植民地主義とは、外部からやってきた人々が、もともとそこに住んでいた人々の土地に定住し、先住民にとってかわって、その土地を自分たちのものにしてしまう植民地主義の一形態です。アメリカやカナダ、オーストラリア、ニュージーランド、そして北海道（アイヌモシリ）などが、それにあたります。

◆シオニズムと宗教的背景

19 世紀末から 20 世紀前半にかけて、ロシア帝国下や東欧で、ユダヤ人に対する迫害や集団虐殺が相次ぎます。こうした状況のなかで生まれたのがシオニズムです。ユダヤ人が差別や迫害から解放されるには、自分たち自身の国家を持つ必要がある、パレスチナに「ユダヤ人国家」をつくるという思想・プロジェクトです。当時のユダヤ人の間ではシオニズムは人気がありませんでした。シオニズムに反対するユダヤ人の方が多数派でした。

ここには、もう一つ重要な歴史的背景があります。16 ～ 17 世紀以降、プロテスタントの一部には、聖書の預言をもとに、キリストの再臨に先立ってユダヤ人がパレスチナに戻り、そこに国家を建設するという考えが生まれました。こうした思想は後に「キリスト教シオニズム」と呼ばれるようになります。現在のアメリカにはキリスト教シオニズムを信じる人々が多数存在し、共和党の保守層などの政治的基盤の一つとなっています。

ただし、キリスト教シオニズムでは、ユダヤ人はパレスチナに戻り、最終的にはキリスト教に改宗し、最終戦争であるハルマゲドンで改宗しない者たちは最終的に滅びる存在と見なされています。キリスト教シオニズムは、救世主再臨の前兆としてイスラエルを強力に支持しながら、実際はユダヤ人の消滅を待望する反ユダヤ主義的なものです。

一方、伝統的なユダヤ教では、ユダヤ人の「ディアスポラ（ギリシア語で「離散」の意）」が教えの核心を構成していました。ユダヤ人の離散は神から与えられた試練であり、神の教えを守ってディアスポラを生きることで、いつの日か神がメシアを遣わし、エルサレムへ帰還させると考えられてきました。そのため、近代に生まれた政治運動としてのシオニズムは、敬虔なユダヤ教徒の目には、神の教えの否定以外の何ものでもありませんでした。

◆イスラエル建国とナクバ

一方、当時のパレスチナでは、アラビア語を話すムスリムやクリスチャン、ユダヤ教徒が、アラブ人として共生の歴史を紡いでいました。第一次世界大戦後、パレスチナはイギリスの委任統治領という名の植民地になります。イギリスは 1917 年、パレスチナにユダヤ

人の「民族的郷土」を建設することを支持し、それに尽力することを約束します（バルフォア宣言）。戦後、委任統治国としてイギリスは、パレスチナの独立を援助する立場にありながら、バルフォア宣言を実現すべく、シオニスト・ユダヤ人の入植を積極的に推進します。そこでは、パレスチナに暮らしていた人々の意思は、一顧だにされませんでした。

第二次世界大戦とナチスによるホロコーストを経て、ユダヤ人国家建設への国際的支持は強まりました。ホロコーストを生き延びたユダヤ人の難民問題もあり、国連は1947年、パレスチナを分割して、そこにユダヤ人国家とアラブ人国家をつくる案を賛成多数で可決しました。当時、ユダヤ人が所有していた土地は歴史的パレスチナの約6%、人口も約3分の1だったにもかかわらず、分割案では約56%がユダヤ人国家に割り当てられました。しかし、そもそもパレスチナ人の意向を無視して、そこにヨーロッパ・ユダヤ人の国家をつくるということ自体が不公正なものでした。

こうして1948年、イスラエルが建国されます。分割案が採択された直後から、パレスチナの各地でシオニストによる集団虐殺がおこり、75万人を超えるパレスチナ人が故郷を追われることになりました。パレスチナ人はこの出来事を「ナクバ（破局的大惨事）」と呼んでいます。人々は、状況が落ち着き次第帰るつもりでした。しかし、ひとたび難民となると、故郷に帰ることができなくなり、78年後の現在に至るまで600万人近い人々が「難民」として暮らしています。

ここで考えなければならないのは、ホロコースト（ナチスによるユダヤ人の大量虐殺）とイスラエル建国をめぐる歴史です。ナチスによるユダヤ人大量虐殺は、ナチスだけの問題ではありません。その背景には、ヨーロッパのキリスト教社会で長く続いてきた反ユダヤ主義があり、それが近代の市民社会になっても克服されなかったという歴史があります。ホロコーストも、戦後のユダヤ人難民問題も、徹頭徹尾、ヨーロッパ社会の問題です。しかし、西洋諸国は自らの歴史的病理とも言うべき「ユダヤ人問題」を、パレスチナに「ユダヤ人国家」を作ることによって、言い換えれば、ホロコーストとは何の関係もないパレスチナ人にその代償を支払わせることによって、解決を図ったのです。

1967年の第三次中東戦争で、イスラエルは、建国時には占領することができなかった、聖地のある東エルサレム、ヨルダン川西岸地区、ガザ地区を占領し、これにより歴史的パレスチナの全土がイスラエルの占領下に置かれました。イスラエルは国際法違反の入植地建設を推進し、西岸ではパレスチナ人の土地が日々強奪され、移動の自由も極度に制限されています。ガザ地区は、イスラエルによる封鎖が長期化し、住民の過半数が貧困ライン以下の生活を強いられてきました。

イスラエルは、ハマースのテロに対する自衛の戦争だと主張しますが、現在のガザで起きていることを、2023年10月7日のハマースによる攻撃から始まった出来事として捉えることは間違っています。国連のグテーレス事務総長は、10月7日のハマースの攻撃は「真空状態で起きたのではない」と述べ、その背景には、イスラエルによる何十年にもわたる占領や封鎖があると語っています。アムネスティ・インターナショナルやヒューマンライツ・ウォッチなどの国際人権NGOは、イスラエルはアパルトヘイト国家であると断言しています。ヨルダン川から地中海まで、パレスチナ人は何十年にもわたり、自由も平等も、自己決定権も否定されています。それが、問題の根源です。

◆瓦礫の下のヒューマニティ

イスラエルではガザに対する虐殺等が繰り返されるたびに、シオニズムに疑問を抱き、国を出て行く人たちも大勢います。そうすると、こうした自国の在り方に疑問を持たない者だけが国に残って、レイシズムがどんどん濃縮され、政策も教育もますます右傾化していきます。

人間が人間であるとは、「他者」を大切にする、ということです。パレスチナ人は単にシオニズムやイスラエルと闘っているのではありません。何十年と続く民族殲滅の暴力のただ中にありながら、あくまでも「人間の側」に踏みとどまるという、そういう困難な闘いを続けています。一方、イスラエルのユダヤ人の大多数は、パレスチナ人に自分たちと同等の人間性を見ずに、彼らに対してどんな暴力をふるってもいいという教育をずっとされています。パレスチナ人の人間性を否定するという形で、自らのヒューマニティを奪われているユダヤ人もまた、シオニズムの犠牲者であると私は思います。

私たちは、「人権」や「平和」「自由」「人間の尊厳」という言葉を、本当に普遍的なものと考えているでしょうか。日本国憲法の前文は、この世界のすべての人々が恐怖と欠乏を免れ、平和のうちに生存する権利を有すると謳われています。しかし、私たちは、その普遍的倫理を行動において実践しているでしょうか。ガザで繰り返されているパレスチナ人の殺戮と破壊を前にして、私たち自身の言葉が本物なのかどうかが問われています。ガザの瓦礫の下にあるのは、まだ収容されていない遺体だけではありません。そこに瓦礫と化しているのは、人間の尊厳であり、自由であり、平和であり、そして私たちが「ヒューマニティ（人間らしさ）」と呼ぶものなのではないでしょうか。